
コトシラ姉。

白紙描写

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コトシラ姉。

【Nコード】

N9554Z

【作者名】

白紙描写

【あらすじ】

『殺人しましょ。』で、主人公コトシラが実のお姉さんとただただ単に、人を殺してく残虐エピソードです。手始めに弟から殺しましょ。

「真剣な話、一度でいいから、人を殺してみたい物です。姉さん！」

目の前には、おれの姉がいる。

おれは、誰でしょう？おれはコトシラです。

おれは、無断で姉の部屋のドアをこじ開けて、中に入り、絵を描いている姉に話しかけた。

「？なんの話を持ち込んできたのかしら？不思議極まりないわよ？コトシラ。」

おれは、姉さんにしか、相談できないと踏んで、実の姉に…話を持ちかけているのだ。

おれは、人が嫌いです。
でも、姉は大好きです。

その名の通り、相談できる唯一の頼みは、お姉さんしかいないのです。わがままですけども。

「おれ、どうしてもやらないとうけない。相手がいるんです。どうか、頼みます。姉」

深刻な悩みです。普通人を殺めるなんて、行為が許される世界ではないとわかっています。理解しています。けど、どうしても、どうしても…殺したい相手があります。しかも複数。

「なにをやるのかしら？まず、そこから説明捨ててくれる？」

真剣に、訊いてくれるようだ…本当に助かる。親切で優しいお姉ちゃんだ。

1 (後書き)

すぐ更新します

「とりあえず、誰からぶつ殺しましょうか？」

最初からその言葉を振って、おれに戸惑いと躊躇を与えるように持ち出した言葉に見えた。

「そんな潔くていいんですか？もう少し、焦らし揺さぶってくださいよ。…殺人は駄目だと」

野獣と人が敵対し、共同するこの世界。少なくとも、他殺はよくあるこの世界である。

そこには、おれらの町があって、村があって、家があって、そして、ここが姉の部屋だ。

姉は、絵を描くのが好きらしい。そこら辺、部屋一帯は絵と紙だらけだ。何の絵を描いてるかだって？

それは言えない。

言う必要がないからだ。

正座しています。

「あらあら、その言い様は何なのかしら？…弱気とか、そう言うのは止めて欲しいのだけれど、」

と言うけど、正直の所は、もろに本気です。それ以外の面持ちでは言い出せませんですよ。

「止めます。と言うよりは、初めから本気です。そりゃもう、全力です。」

「いい心がけね。」

誉められるほどでもない。
あ、誉めてはいないのか。

「心がけはいけません。信念です。ムカつく奴は、土に埋めるのが正しいと信じてます。我が地方の名残ですよ。」

「そのような名残が有るのなら、私も土に埋まっています。」

恨みを買われたこと有るのかな？

…そうか、なる程、それが怖くて、毎日家に部屋に引きこもって、なんやなにやらを創作していたのか。

頷ける理由。

「怖くて、外に出れないんですか？姉」

唐突にも、適当に話しを持ちかけた。

「現実逃避がしたいの」

すぐ答えてくれた。

「現実逃避って何ですか？感じが難しいです。」

おれの実年齢は、11歳で小学生五年生と言ったところです。

けども、この世界に学校なんてないし、プールの授業なんて物もありません。

付近の湖が海だと思っていました。

でも、お父さんから聞いた話だと東北四百キロに海存在するとしりました。

人間知らない物は、概念から知らないようです。

「この世界の否定です。」

「まるまる否定するんですか!？」

「いえ、分かりやすく纏めただけです。あなたは、小学生だから分からなくてもいいのよ? コトシラ」

小学生ではない!

小規模機関第二百五機関中立機関だ。

この王国の国立機関学校の直属直轄学徒生だ。

嘘です。狩人の卵です。

「分かってみたいです。姉!」

「好奇心は狂気よ。それでもいいの? 後戻りは出来ないわよ?」

姉が凄い形相でこっちを見るので、そつぽを向けた。

悪魔と天使は、いったい何がしたいのか? 神の基準は信者の数で決まるのか?

そう言った疑問の深みにはまったような…相違や矛盾を会わせようと頑張る哲学者のように、

「何を考えてるの？ 以外と怖いわよ。コトシラ。…小学生らしい表情をしなさい。」

「殺人を犯す話を持ちかけた時点で、小学生の表情なんて出来ません。訝しげで険しい表情と言ってください。」

「言いたくないわ」

その拒否を発動した顔を見ていると殴りたくなってくるけど、年の差と暗黙の格差で何も出来やしない。

それにしても、ペンキや絵の具のにおいがひどいな。ミネラルウォーターで筆を洗うところが姉さんらしい。

ゴミ箱の内側の内蔵がペットボトルの墓場になってたし、

ここからは確認とれないけど、多分そうなってる。

「一つ、話が脱線していようで、していないのだけれども、そもそも、どうして、そこまで人を葬りたいの？」

安易に直接的なことを言う姉。

部屋の温度が一気に下がる、それはあたかも、何かに縛りを利かした蛙のように、

「それ、言ってる言いの？姉さん」

「言っても言いけど、さっきみたいに地方がどうのこうのと言う寝

言はなしでお願いします、わ」

「わかった…」

息を飲む、ここで笑いを取ってしまったら、おれが誰かに殺される。笑いすら取れないけども。

空気をのむ、おれの信念、ム力つくだけでは説明不足。本当の正真正銘の真理を言う。てか吐き出す。

怒りや恨みだけじゃない、もっと大きな理由。

それは

「自分が嫌いだからです。」

「？ よく聞き取れませんでした、もう一度言ってくれる？」

姉は椅子に座り、こちらを見下すようにしているため、言う通りにする。

「自分が嫌いで、自分は人で、だから、人が嫌いです」

ずっと自分に愛想尽かしてた、俺だけじゃあな筈、日本人なら殆どそう思ってる。

俺たちは日本語を喋る異世界人だが、きっと日本語を言える人は、考え方も微々に似てると信じたい。その案だ。

「それは、人が嫌いだから自分が嫌いと言っているの？」

逆転の発想は、哲学者とかがよく駆使する類だ。

同じことを言ってるだけだけど、

「全部嫌いです。そこまで言いますか？ 言いますよ」

「可愛い脳味噌してるのね。弟として、ここまで完成された稚拙な思考を持っている弟は初めてよ。嬉しいわ…お父さんに感謝しようかしら。」

おれを生んでくれた母と父に両方に感謝してよ。

なんで、父さんだけなんだ？

深く考えないことにした。

「おれは嬉しくない、けど、楽しいし面白いではある。この世の生まれてきて…」

「あなた、神経どうかしてる…あ、人を殺めようとしている人に、正常な人はいませんね。」

「姉さんも引きこもっているだけですし、何をやっているか？と聞けば、紙一面に、豆腐の絵や牛乳だけの絵を描くだけですし、人として歪んです。」

ついに、言ってしまいました、禁句とされる一言を…

恐らく、この言葉に姉はこっぴどいおれを下界の地獄に馳せらせだろつ。

「人がいなくならないと、平常心を保てない？コトシラ」

人が今より少なければ、より良かったかも人間関係的にけど、この世界も人が多すぎる…

あ、悟った。

なる程、おれは人が嫌いな訳ではなくて、人によっていただけなのか…

「気づきました！姉！俺は、人に酔っていいだけです！すごいです姉」

気づいてみれば、簡単なことでした。人の居ないところへ行けばいい話だったのです。

「…それで？ あなたの今の意志は…何？かしら」

頬杖ついて、纏めてくくつて、訊いてきた。

勿論答えは、

「人を減らせばいいんです。何処かへ逃げるなんて出来ません…手始めに、弟から行きましょう。」

訂正はしない、決意表明をしたにすぎない。

「あはは、やっぱりそっちに繋がるのね。面白いわ。なら決まりよ。私も協力してみるわ」

「是非お願いします。」

なんだか、意味がおかしいけど、成り行きって奴に任せます。だって、結果が欲しいし、嫌いな物は嫌いだから、

姉は、椅子から立ち上がり、筆立てを盛大にぶちまけた。

「散らかりました。誰の仕業かしら？　ね？　コトシラ」

「おれが言えるのは、姉自身がわざと蹴り飛ばしたと見受けられますので、姉の自業自得です。」

お茶目にどじをした…とは言えませんが。だって、大切すぎるほどの存在である姉さんを体の低い個性の位置づけをするのは、おれだけの判断ではまかなえません。

おれは、誰よりも姉だけは認めます。
従います。頼みます。

「そうね。私がすべて悪かったのね。なら、私は筆以下の存在で良いわ」

位を下げたのか？

意味が分からない。…おれをあざけ笑っているとか、か？

おれの中には、姉しかないから、姉はおれを弄んでいるというのか？

位を下げるというのなら、おれも下げないと…

止めた。そうなら、そうであるのなら、おれが姉を虐げることだつて出来るじゃないか。

「そこからの結論だと、姉さんは、俺の道具つてことになりますよ？　それでもいいの？　いじりますよ？」

おれはバカみたいなことをいつてみる。

この言葉に『扱う』の意味が込められてはあるけど、協力してくれるのは姉さんの方だ。下手に出るのが当然なのに、弟なのに、ここまで自分勝手な言葉は、生まれて初めてだ。

いや、もう口にしたから、生まれて初めてだと訂正すべきだな。

「馬鹿なのは私の方です。あなたの方がずっと優れてますよ？ コトシラ。」

言ってくれましたね。とどめです。

姉さん本人は、計画案立ったのか、偶然の口だったのかは、皆目見当もつかない。

けれど、心を読んでいとしか思えない。言動。

心の内を覗き込む、人心読解力。

偶々と言うことにしよう。

「おれは優れてはいませんが、恐れ入りますが…ね？」

床に転がる筆を手にしたコトシラ。

この行動に意味はないけど、コトシラは何となくで手にしてみた。

「あらあら、自分の価値を低く受け取るのね。…なら、『よくできている』って言うのはどう？ 文学的ではないかしら？」

良くできているとは、何だろう？

そして、何故そのように、そのような言葉がほいほい出てくるのでしょうか？

おれは、文学よりも数字の方が好きだけどね。

「一つとしていつてみては、おれがよくできているとは何ですか？」

難解授業の答えよりも気になる…言葉回し。

一言言つて、おれの方が教わる側で教える側ではないことは、いつも通り知っている。なので、

人の話を聞くときだけは、凄いですよ。

人間メモ帳です。自称するくらい自身があります。

「その質問を今、答える必然性はないわ。…あなたがそれを認めるか、認めないかを私は知りたいの。」

何を理由にしてそうなったの？

あ、おれの価値観についてか。なら、答えは一つだけ。

「認めません。おれは良くできていないから。それと、狂っているから…」

そう、自分のそのままの言葉だ。

おれは狂っている…人で居てはいけない。と言うことで、人を殺めます。

減らします。

そこが、よくできているの…

「ん、何か、叫びましたか？」

「何も言っていないわよ。あなたは殺人的だと言っただけよ。」

「言ってるではありませんか」

「そこは保留します。と、時間がもつたいたく感じてきましたから、今から始めようかしら？」

訊かれなくとも、おれは筆を片時も離さず、正座から直立しています。

もう今からでも、やれますよ？ 筆で…

「見てごらんのように、もう準備は整っています。やりましょう。姉」

「いい行動力ね、見込み通りよ。でも、筆だけでは、眼球くらいしか潰せないんじゃない？」

物理的に、力のある人でも、簡単に人を殺せますが…生憎、持ち合わせている人物は、子供と女性、…どう見てもやられる側の人材である。

「そう言われなくとも、筆で肉を貫くのは困難でしょうし、皮すら外壁ですよ。」

筆の強度と鋭さを軽く見積もっても、あの弟を殺すことは不可能です。

弟は言ってしまったえば、俺より強い。

あ、でも、筋肉とかで、攻守を増強しているわけではないです。

単に、狩人の血が強く、頭もキレています。

オールトータルに、万能な人と言いましよう。

それが敵。外敵です。

「嫉妬心だけで、筆を用いて殺すのもやぶさか不満でしょうし、攻

撃力不足です。あなたが、どれほど、力があっても弟には勝てませんよ?」

言い回しが解読できない。

つまり要するに、筆と腕力を増大させても尚、弟には勝てないということを良いついのだろう。

…

…ぶ、当たり前の言葉ですよ。

筆で人を殺せたら、書道界に衝撃と衝動が揺らぐこと間違いなしですね。

「小難しい言語ありがとうございます」

「いえいえ、どう致しまして…あ、良い物がありましたわよ? これはどう?」

これはどう?と蟠るおれに、差し出されたのは、コンパスでした。

「コンパスですか? 考え物ですね。…確かに、筆とは数段階上等の製品ですけど、人を殺すほどの殺傷力があるとは思えません。あと…」

あ、いや、ここは全然言える立場ではない。これは言うべきではない。

コトシラは、言葉後半言いかけた言葉の意味を理解して、口を閉じた。

「あと? 何か、言いたそうだけど、…何なら、言ってくるれかしら

？ 気になります。」

気にしないでください、気に障りますから、自分に対して…

「言えません。これは使えますよ。姉」

すぐさま、話を切り替えたが、流石すぎる姉はそれ以上は詮索しなかった。

「どこが使えるの？ 只の文房具じゃない。それとも、最近文房具で人を殺めるのが流行りなのかしら？」

話を合わせてくれる気配は無し。正直の意見でしょう。あきらめていましたが、やはり、文房具は質の悪い狂気にもならないらしい。

「文房具類は諦めました。」

素直に言ってしまうえば、それでおしまいのことだった。時間が勿体なかっただけでした。

「それでいいのよ。なんなら、王道に任せて、包丁はどうかしら？ 日本の拳銃よりも殺傷力高いわよ？ それに、すぐに手に入れる。」

王道が一番安全で、成功率も高いと訊かれる。おれはそれさえも、背きたい。

「包丁は、返り血が付着します。王道な理由で片付けます。洗濯が大変です。」

「捻りが欲しい。こんな物でも、息耐えるのか！って奴。」

「サランラップ」

「笑ってしまいます。」

「水槽の角」

「水槽がないです。」

「事故死」

「運命は変えられない物だと思います」

「ネタ切れね。」

「少なすぎる持ちネタだった。」

「笑い殺しとか、無理ですねよ？」

「姉さんが殴って殺してください。」

「本気にはしてなかったけど、何となく、言ってみたくなった。」

「私の体を見て、そう言ってるの？」

「体育会系ではないのは明らかだった。」

「言っなければ、貧弱そう。」

「意外性ですよ。そんな魔法でも持っているのかな？と思って……」

「みる世界を間違ってるわよ？ 魔法なんて使えないけど、そんな系、合ったじゃない？」

どさくさに話がよからぬ方向に直進する。

「科学ですか？ そんな回りくどいことは嫌いです。…もう、椅子で良いです。姉さん椅子借りますね？」

呆れて、そうすることにしました。

「あら、そう…」

「今日は、親が留守ですから、丁度良いところに杓文字が有るって所ね。」

台所へ向かったと思えば、馬鹿な考えを実行する。態と言つのはもう間違いらしい。

計算してるとも、思えなくなってしまうそう。真性とも認めたくない。

これは誘導人証しているに違いない。

ややこしくなってきたから、考えるのはよそう。

「杓文字では、蒲鉾を切断するのがやっとだと思いますが、…しかも、すっごい切れ味の悪さで…本当に出来ますか？」

訊いてみる、おれの左手には姉の座つた木星の椅子。

歩く度に、床とスリ引きずる音がする。気にしない方がいいのか、静かな二階建て一般住宅に、鳴り響く。

それと、ここまで語るところも語りたい。…姉の部屋から階段を降りる際、騒音がとてもじゃないけど、五月蠅かったです。

姉に『片手引きするのは止めなさい。』と優しく怒られたが、おれに、そのような言葉を今更、言う方がおかしい。

おれは、人間として終わっているの…

「叩いてなぶり殺すのなら、可愛いと思わない？ その理由です。」

「可愛いさの問題ですか、別に、可愛く無くても良いし、姉に、杓文字は似合いません。…姉は、そうですね。釣り針が似合います。」

決るようで地味な道具、魚類なら『し』の字の悪魔。文字通り、『死』を意味しています。

これまた難題で、どう利用して人を亡き者にするのか？ が一番の課題。

まあ、釣り針なんて、買ってくるの面倒だから、語らいで終わらせますけど。

「釣りは好きではないの、私。言うのなら、泳ぐのが好き…かもね。」

昔は湖で泳いでいたとか、今は知りませんが、よく泳いでいたので好きになる…とは、あり得るかも知れませんね。

「おれは、泳ぐのは苦手です。泳いだあと、風邪をひいたり…何てことよくありましたし、」

「それは知ってますよ。コトシラ、あなたはよく、風邪をひいていました、弟と違って、病弱だから…よくよく看病したりしていましたわ。」

お母さんより、お世話さんだ。

おれには、そうされた記憶がないのは、何かの陰謀かも知れないな。

ガジャ

ギギ

椅子が引きずれる。

「とりあえずだ。姉、その凶器で本当に、いいのか？」

確認、今の時間の進行具合だと、もう時間切れだから…杓文字でいい。

杓文字が人をホフる程の殺傷力が無くとも、姉事だから上手く使ってくれるはず。

絵を描くのは、空間を掴むって事だ。

人間の構造も、絵を描写するのと同じ要領で、把握し、ピンポイントで突くことだって出来る筈。

物は試しだ。

杓文字で死ぬ人間も見てみたいしな。

「あら？ 少し前まで、否定や拒否を行使していた、にも関わらず、今度は肯定ですか。心がコロコロ変わるのね。コトシラ」

コロコロ変わるのは、場面と時間系列だろ？ それに合わせて、人が動いているようなもんだ、大きくは言えないけども。

「時間がないんだよ。そろそろ、弟が帰ってくる時間だろ？」

4時56分。五時丁度に帰ってくる訳ないし、もしかしたら、今来るかもしれない。

心の準備も必要で、殺す準備も重要。

…トリックや殺人装置を配備するわけではないけど、玄関付近で待ち伏せして、律儀な弟が靴を靴箱に、収納する背後を狙うのだけど、

兎に角、ゆとりの時間は合った方がいい。
その案だ。

「かしこまりました、じゃあ私は、夕飯前のおやつでも作っておく
わ。弟が来たら呼びに着てね、すぐさま、トドメを刺しますから…」

「うん、心強いよ。」

…
コトシラとコトシラの姉は、自分達の持ち場につき、弟が帰宅する
のをまちまちと待った。

一方、その頃より少し前の弟と言えば、
草木が生い茂る、村のはずれの狩り場で化け物を狩猟していた。

ブギヤシャリ

「二十三頭目ですね。あと、一匹で三の倍数になって、歯切れがい
いと思いましたが、残念。時間切れです。」

いつもながらにして、10分後行動を心がけている、コトシラの弟
は、今日も歯切れが悪い狩猟数で用事を終える事になりました。

週に三回の炎狩猟部の部活は、とてもきつく生半可な気持ちの持ち
方では到底、続けることが出来ません。
継続は、大切だと弟は心がけています。

その甲斐あつてか、近所で噂の天才児と発展している様子です。

部活動のメンバーは六人です。

ここでは、メンバーの名前は伏せておきましょう。

「おー、コトヤ。今日も前にまして、歯切れの悪い数値を叩き出すじゃないか。…しってつか？ 二十三は、素数なんだぜ。」

と、コトヤの所属する炎狩獵部の副部長、が清々しく話しかけてきた。

「馬鹿にしているの？ 僕は、そこまで狙った数値は出せないし、自己ベストも、更新しちゃいないよ。そもそも平均値と同じくらいだし。」

一般人は、七時間に、十三頭くらいが妥当なところだが、コトヤと言う者、およそ半の三時間半くらいで二十三頭討伐してしまうのだから、言葉って言うている以上、凄いことなのである。

他の部員に比べると、やや、慎重すぎる面が有りはするがそれでも尚、結果と成果は上位副部長と互角の格差だ。

誰も文句を言わない実績と言える。

「はっ、均衡を重視するおまえの台詞は、俺からしてみればクソ喰らえだ。…俺なんて、19匹ぞ?!、お前と2の倍数差で負けているだ。文句の方が先に出了がるからやってられない。」

副部長は、結構飽きやすい性格してるから、途中半ばで、立ち昼寝とか、立ちうたた寝とか、闘いながら寝る事だっでしていた。

この人も、十分、人から文句を言われる闘い方しているよ。

「文句は言ってもかまわないけど、僕はそれよりも、副部長さんの顔の傷がおぞましいです。」

一昨日の部活の話し。

副部長さんは、いつも道理熱心に、狩りをやっていたのだけれど、突然現れた一級化け物に意表を突かれ、顔の深々と傷を負ったのだ。

顔が横にスライスされたようです。

きれいに、出来た顔の地平線が思いのほか、おぞましく映ります。

元々顔つきの悪かった副部長さんですが、その件で一段階、飛びつきりのある顔力を誇るようになりました。

「うい？ 何か文句でもあるのか？ 悪いけど、もう俺は文句を言えない立場になってしまったらしいんだよ。」

「え！？ と言うことですか？」

いつも僕だけに文句を言ってくれる、副部長さんが今回に限って、文句を言わないなんておかしい。

顔つきがおかしくなったから、頭も可笑しくなったと言う理論を、誰かが証明してくれたら、僕も潔く、躊躇い無く認めるけど…

本当に、こういう事でしょう？

「おい、「コトヤ」

なぜ、理解できない内に、僕の肩を叩く副部長さん。

何でしょうね、この感じ、しんみりしますよ。全く、次の言葉に、驚かされた。

「お前が今日から、副部長だ。今日から、俺の名は、稲荷口と呼んでくれ…」

イナリグチ。

初めて、副部長さんの名前を聞いた気がした。

何時だって、副部長さんは、『俺の名を呼ぶな！ おれは、副部長さんだぞ！』怒っていましたからね。

「イナリグチでいいんですか？」

飲み込みの早い僕は、再度、確認した。

「よお、副部長さん。」

そう言ってくれるイナリグチ。

僕の名前を差し引いて、副部長さんとは、つくづく、僕も成り上がったものだ。

「そんな事言わないでくださいよ。半分、本気にしちゃいますではありませんか。」

僕はそういう、何、なんて事ないよ。

僕は僕自身の力を知っている。

副部長だなんて、柄でも器でもない。

僕はただの普通の人です。

「本当の事を言っているだけ。ほら、思い出して見るよ。この傷を……」

イナリグチは、自分の顔の傷をなぞる。

痛くないのか、綺麗に沿っているのか、何ともない表情を見せる。

「昨日の大怪我だったのに、ここまで回復するイナリグチさんはやっぱり、ただ者じゃない。」

僕はそう確信付けるしかなかった。なぜなら、僕にとってのイナリグチさんは、副部長さんだからだ。副部長は何時だって、強い人やタフな人何だから……

「この傷の事で、部長に愛想尽かされちゃったりしてしまったんだ。…そして、その結果、俺は副部長を下ろされる羽目になったんだとさ。候補にお前が配属される。」

嘘みたいな話ではある、あの頑固で堅い部長さんが、僕を選ぶなんて…いえ、それ以前に元副部長のイナリグチを下ろす事自体、不自然だ。

嘘だと言いつけることは出来るとして、嘘じゃなかったときは、イナリグチさんを疑うことになる。
ややこしい限りだ。

「それは本当ですか？ 僕は信じますよ？」

「信じさせる義理はない。な？ 副部長」

僕を見て副部長と呼んだ。これは決心付けさせる言い方なのか？
そうであろう。

「じゃあ信じます。…あ、そうだ。僕、これから、五時までに家に帰らないといけないんだ。だから手伝ってくれるかな？ 獣の死骸集め…」

僕が部員を操る事なんて出来るのか、確かめるための指示だ。
別に、従ってくれるとは思っていない。
従わなければ、それまでだったと言える。

「分かりましたぜ、副部長」

とイナリグチさんは、僕の話の聞き、素直に従いました。

僕は身を疑い。一瞬思考停止し棒立ち状態で佇んでしまいました。辺りは、肉片と血肉の海です。

無論、それらの破損物は全て獣の物です。決して、人のものではありません。

それを踏まえても、この光景は異常。血や肉を目に移すのが苦手な人や免疫のない人はみない方が思われるほどの残虐で酷たらしい光景。

異常な光景でも僕たちにとっては、いつの通りの景色。

慣れれば、それまで…でも、僕は初めから慣れていました。

その理由はおそらく、遺伝だと思う。大抵の人は、皆、こんな景色ばかりしか見ていない。

だから、遺伝子から慣れていましたのだと思う。

いきりためですからね。獣殺しは、

…

掃除をするとは、この臓物から脊髄までを綺麗に片づけること。

その際、使う道具とは何だろうか？ 決まっています。箒です。

箒でこまめに、生ゴミは集めて、袋に詰めるのです。単純過ぎますが、これは掃除であって、アイデアを駆使する場面でもありません。

綺麗に元に、戻すだけですから…

「副部長、集めましたよ。」

イナリグチさん意外にも、部員はいて、さっきまで空気のように関

わっていないかったがここで一人登場しました。

処理班担当のマカルとカイロです。

マカルは女の子で、美しい人柄。

カイロは男の子で、親切な人柄。

どちらとも、死に対して、全くの恐怖を抱かない。心の死んだ人たちです。

可哀想な人たちです。

家柄が響いて、死ぬまで闘うように産まれたときから、色んな事をやらされてたようです。僕には理解できません。

どうして、死んだ人間を造りたいのかを…

「あゝ、マカルか、すまないがおれは副部長ではない。今日からあいつが副部長だ。分かったか？」

イナリグチは、僕の立っている方向に指を向けた。立っている場所に出はなく、僕に対してだ。

「分かりましたよ。」

必ず、尾語に『よ』を付けるのは、彼女なりの個性の出し方なのであろうか？

気にしても、気にかけても、あの二人は死んでいるので興味が無いが、一応、個性として受け入れよう。

カイロは、独りで会場の草をむしっている。滅多に喋らないのが、

彼の個性と思う。

部活は、部活の為に用意された試合会場が設けられている。基本ただの空き地に、フェンスで囲ったような安い造りになっている。

土は栄養分が不足して、砂に近い。でも、雑草だけはのびのびと育つ。矛盾しているとも思うし、嫌がらせにも思う。

まあ、雑草にどんな感性を抱いても、

どう思っても、カイロが引っこ抜くだけだから気にしてはいない。

フェンスに囲まれた空き地の中央には、穴が存在していて、そこから、化け物達が湧いて出てくるシステムになっている。

餌は化け物をおびき寄せるフェロモンのような物で、穴は、森に繋がっている。

と

どうのこうの言っているけど、結局は、暇つぶしの地方が用意した遊具なのですよ。

「副部長、このゴミは、ドコに運べば、いいのよ」

持ち運ばれたのは、化け物が持ち込んできたのであろう、ビデオデッキである。

どうしようもない、普通のゴミだったのでコトヤは悩んだが…

「燃えないゴミと書かれた紙が貼られたアルミ箱に、捨ててきてくれればよいかと…」

これが副部長、初めての仕事だった。

「分かりましたよ。」

テクテクと、小走りでどこかへ消えてしまったマカル。

大丈夫だろうか？ 今日は燃えるゴミの日じゃなかったし、とうにゴミ収集車は今日の仕事を終えてるし、と不安をつのらせるが…とうにかなるだろうと、随分適当に決めつけたコトヤがそこにいた。

ふと

「おい、みんな集合しやがれ、今の職場もすぐさま放棄しやがれ、さっさと来い！」

若干、怒鳴りつけるような大声で収集を促すのは、頑固で奇天烈の部長だった。

僕も、副部長気取りを止めて、会長の所へそそくさと、向かった。

「よし、皆、集合したようだな。俺自身は嬉しいぞ。よしよし、みんないい子だ。死んで良い人間なんて、この世にはいない。」

とんでもないことを言うのは、会長の癖だ。大袈裟と言わざるを得ないお人だ

僕はこんな人は嫌いですから、気にもとめていない。

「みんなの本日の成績発表とする。成績発表を言ってから、もう一度、作業に取りかかってくれ、後は自由解散だ。理解したか！」

ただのうるさい人でもある。こんな人が部長だなんて、幸せ者ですね。恵まれてる人ですね。

「では、出だしの一発から、一位を發表したいと思います！」

テンションだけ高い上、發表とか言ってる。一番、早死にしそうな人一位ですね…この人は。

「52頭で、ダントツ一位のタカキ！です。」

僕の数の二倍はありますね。仕方ないけど、才能には勝てない。超えられない上、タカキ。

武器がS字フックのみで、戦う…僕の目で今までみた中で一番の狩人。

ここまで徳化された人には、僕はなりたくない。

「そして、二位はこの俺自身です！」

そうですね。期待道理でした。期待を裏切ってくれないのが部長と言つのも知っている。

副部長となつてなおさら気づく。特性。

「次に、コトシラ弟！頑張りましたね。今日からその努力を認めて、副部長です！パチパチ」

そうですね。嬉しくありませんけど、イナリグチさんが認めるのな

嬉しいです。

僕の帰路を踏みしめる足取りは、軽やかとはほど遠い、披露の一途だった。

今日の出来ごとは、多いものじゃなかったけれども、多分、大きいものであったであろう。

副部長になって、副部長気取りは止めておきたいからな。気取れば、僕自身も積み上げてきた物がおかしくなる。きつと、この後で何か、悪いことでもあるのだろう。

良い事の後に、悪いことが起き得るとは、なかなかあり得そうな物言いだ。

起きると思えば、難でも起きそうだから考えない事にした。

コトやは、自分の荷物。主に、部活で使われた長太刀だ。刃物等は低調に取り扱っている。しっかり、スチール製の金物用品収納ケースに収めて、担ぐような形で背負っている。

筋力に自信が無くとも、そこをどうにか、非物理操作でどうにかかなう。

僕の特技たる平均化は、うまく使えば、電車より速く走れる。

様々まばらに、天才だとか、才能が有るだと言っけど、僕は正しい人間なだけなのですよ。笑えますね。

一人歩きも、寂しいものです。

家に帰れば、兄さんや姉さんが居ます。

兄さんは、僕に優しいけど、姉さんは少し距離を置いてるようです。二人とも、どうも昔から僕を嫌っているようですが僕は好きです。

家族ですから、

それでも、良い家族だから。

「そう言えば…」

今日は、父母たちは留守でしたね。

なので、今日は僕たち兄妹だけですか…

…たまには、それも良いかもしれませんね。

兄妹だけの夕食パーティーですか。

兄は、酷く憎んでいて、反発的に優しくする。

ちよつと、異質な姉は、僕だけを避けているのではなく、自分以外の人間と接するのが苦手なだけかもしれない。憶測ですが…

それらをふまえて、夕食パーティーです。

コトやは、気づかぬ内に、家の前に、立っていた。

佇んでいた。

「ここが我が家。」

普通の家だ。感想は以上。

すでに何年も、見慣れた造形だ。

そうですね。家です。

玄関の扉を開いてみせるコトヤ。そして、すぐさま、担いでいた鉄パイプのような武器ケースを靴箱の隣に備え付けの傘立てに立てた。

「ただいま、」

物静かな、玄関付近。台所付近では何かを作業をやっている模様だ。まな板を何かで叩く、音が聞こえる

包丁だろう…

思った。思ったがしかし、誰がその音を奏でているのか…一目にし
て、見ないと分からない。

誰も返事をしてくれないそうだった。

僕は靴を、足から抜き取り、靴箱へと戻す。

…すると、僕の視覚から、思いも寄らぬ何かが、振り下ろされた。

バグチャグサリ

音は高々だ。

なにが起きたのでしょうか？

知りませんが、分かりませんが、おそらく…頭が痛い。

痛いだけなるよかった。まだ、許される範囲です。でも、何でしょうね？ 頭上がなま暖かいです。

バシャゴリ

首が曲がりそうですよ。痛いとおり越していますよ。死ぬ痛みと同じですよ。

どうにか、誰にか、助けともらいたいですよ。

「あれ？ 結構、人ってしないない。生き物だったのか…気絶するしないな」

当たり前です。僕は、死と紙一枚で、ふれていたのですから、死に筈が有りません。木製の椅子だけでは、死にません。

「なら、これでどうだろう？」

グチャリ

ぐぐぢゃ

僕の兄はなにを考えているのだろう？

まさか、僕を殺そうとしているんじゃないだろうか？僕は腹部をえぐられても死にません。処置をしないと死にますけど。

「兄さん？ なにしてんですか？」

僕は一言訪ねてみる。確かめる方が早いからだ。なぜ、木製の椅子の破片で、腹をえぐるのか…疑問です。

「てか、お前の心境が、なにしてるんだよ。お前本当に死ぬぞ？」

ぐぐぢゃ

ぐぢゃ

ずずず

引いたり、伸ばしたりしている。なんにも感じない僕は、本当に死なないじゃないかと思った。
しかし、

「何やっているの？ コトシラ、そんなんじゃ、死なないわよ。」

なにやら、杓文字を携えた姉が現れた。
何をするのだろう？

ジャコ

じゃこ

ぐしゃぐしゃ

ずずずざくざく

杓文字にこんな使い方有とは思わなかった…手の感覚がない。
足の指を動かすのが、やっとだ。

「？何か言いたそうね？ 素直に言ってみたら？ 弟さん？」

僕の機能するはずのパーツがぐちゃぐちゃだ。でも、なんでか…満たされている気分だ。錯覚だろうか？

「が…い……………うあああ」

言語がままならない。その理由は、もしかすると、僕の機能するはずの人がぐちゃぐちゃだからだろうか？ きっとそうなのでしょうね。

うまく喋れないのはそのせい。

もう喋ろうとも思わないけど。

「ここまですると、虚しくも思えるな。人って、死ぬと努力も無くなるから、困る」

かといって、生きすぎるのも困る。

これ、僕の意見ね。

もう、僕は手遅れだと踏んで、何もしなくなった…姉も、兄も、…ただ杓文字だけが喉元に突き刺さっているだけだった。

「殺すがは、消費者と同じ考えだからね。提供者や生産者の方が難易が高いのかもしれないね。」

なにを言っているのでしょう。姉さんは、僕は百円均一の玩具ですか？

そうか、その程度だったのだと、うん、すっかりしました。

さようなら。

コトシラの弟は、死にました。

数分後。

「こんな、あつさり、死んでもいいのかしら？ もう少し、あらがつてもよかったのにね。」

「ひどい事言いますね。実質上、ひどいなどと言つ言葉を使えない立場では有りますが、」

俺たちは、残飯処理と同じ事をしていた。人間で。

「早く死んで欲しかったと、思っていたでしょ？ 本当は、」

簡単に死んでくれた所為で、杓文字でも人を殺せるんじゃないか、と仮説が実証され始めましたね。けども、

「思っていた。思っていたけど、逆に、弟にしては、かなり早すぎる死だとは思います。『あの弟が簡単に死ぬはずがない』そんな感じですよ。」

基本、おれより、力のある弟がなぜ抵抗しなかったのか…そこが難点である。解けない謎、大袈裟か…

「早くしにすぎたってわけ？ 理想じゃなく、現実で？ うう、あなたの考えが分からない。」

「どう言うことですか？ 例えば、なぜ抵抗しなかったのか…の部分ですか？ 疑問ですよ。」

人なら、死ぬと分かかって、わざわざ、死に急ぐなんて、頭が可笑しいとは思えない。

「簡単な話よ。『彼はあなたの弟』で居たかったのよ。」

あ、思い出した。

兄は家に帰ると、弟を虐めるのが日課だと、殆どの兄が言っていた。

つまり、虐められないの弟じゃないと言いたいのか…
いじめの範疇を超えてるけど、

「弟だから虐められると、そう言うことか？ 姉」

「それも一理あるけど、気持ちよかったんじゃないの？ ただ単に…」

「え、なにがですか？」

「殺されるのが…かしら、」

真面目な弟だとは言っていたが、虐められるのも、真面目に受けなくともいいのだが…
仕方ないか、弟出し。

ゴミ箱に捨てた。弟を

「でも姉、僕が風邪で苦しんでいるにも関わらず、平然と看病を続けるなんて…第三者の視点から見れば、ただの傍觀行為と苦しみ見せ物にしかありませんが？」

意味のない言葉で冒頭を構築する。

冒頭部分を意味の意味の無い言葉で構築したがるのはおれの癖である。

「何を言っているのかしら？コトシラ。…人の苦しむ姿を見るのは、それを見ている本人でさえも苦しんでいるように思えるの、そして、苦しんでいない感じ…」

つまり、『うわぁゝ痛々しい…』と感じるそれを楽しんでいると言うことですね。

よくわかりました。

「姉の台詞を頼りに、おれも、姉が苦しんでいるとき笑うことにしました。」

決意を改める。俺も、最低でも最悪な人になってしまったため、考え方や信念を変えないといけない。

まずは、悪い人間のなり方を身につけないと、

「良いわね。…なら、あなたが死にそうな顔して、地べたをはいずり回っても、私は平然と熱いお茶をすする事にたわ。」

姉らしい苦しんでいる者への見方だ。

そしておれは、笑いだけで。

姉はお茶をすするだけ…

「…そう言えば、今何時です？ おれ腹が減っているのだけれども、

」

別に腹が減っていることをアピールしたいわけでは無くて、時間が気になっただけです。

「時間的に、7時…腹が減ったのなら、先ほど作っていた作り欠けのピザがありますよ。」

と姉が言うが、おれは全身とはいかないが、ほぼ全身血まみれなため、風呂に入るのが先と思われる。

「ああ、わかった。風呂にも入りたいから、台所のピザをつまみ食いして、風呂にはいるよ。」

玄関で後片づけをしていた、姉とコトシラだったが、俺の方は血吹雪を直撃したあげく、姉のように、エプロンと言う防災服を装備していなかった為、本当に血塗れになってしまったのだ。

風呂場で服もついでに洗わなくてはいけない。

遣ることは、沢山ある。

「私もお風呂に這入らせて、…嘘です。」

なんとなく言ったのか、聞き取れませんでした。姉が言った台詞は恐らく、『生焼けのピザで腹を壊さないでね。』と言ったはずだろう。

おれは、テクテクと擬音をまき散らせながら、台所脇の風呂に足を踏み入れた。

勿論、ピザをくわえながら、

コトシラは、洗濯機が合ったり、洗面器が合ったりするスペースに、たどり着くと、すぐさま、みる限り血まみれな身にまとう服を風呂場のタイルに打ちつけた。

ベチャリ

微々にも、妙に生々しい音が風呂場に響いた。少し自分に対する罪悪を計っているようにも感じられた。

「とりあえず、タワシなどで洗っとくか…」

衣服の繊維も考えず、タワシを使用すると宣言した。一種の物への苛めです。

コトシラは、そう決めると、どこからタワシを手にとり風呂場へ向かった。

がらがら

左でがらがら鳴るスライド扉を閉める。

密室と化したシャワールームは備え付けのハンドルで一気に、煙る蒸気で空間を満たした。

シャワー

水圧を血にまみれた衣服に、与える。
あり得ないと言っばかりに、血と水が混じり、密室に弾け飛ぶ。

「あ、ええ、あろ」

言語障害を起こすほどの水圧。爆弾と同じ威力か、最低でも放水車のそれほぼ同じ力を誇っている。
ノズルを持つ手がガクガクだ。

それでも、強烈に悶える衣服をこれでもかって言っほど、タワシで洗う。

ワシャわしゃ

凄まじい勢いだ。今でもこの左手が、身震いして、…保っているのがやっとと言える。それでも、それだからこそ洗う。弟の血を根こそぎ荒い。弟と言う存在を無かったことにしてあげる。

これが唯一、俺が弟にしてあげる行為だ。

許せ弟、なんて生暖かい言葉は掛けたりしない。おれは、なま暖かいような言葉を与える人間ではないからだ。おれは、俺の出来る最大の厚意：つまり、弟の染み着いた衣服を洗うことに繋がるのだ。

おれは、弟が憎かったから、殺した。弟は兄に従わなくてはいけないから死んだ。そして、弟の存在を無くしたいと思えば、…弟もきつと、分かってくれるはずだ。

これはあくまで弟のためなんだ。

数分後、コトシラはその活気と勢威を使い切り、疲れ始めていた、言っなら朽ちていた。

シャワーのノズルを壁のあのソケットに掛け、品もなく、口に水をためていた。

これでもか五年生だ、…まだ許されるはず。
そうコトシラは思った。

「湯に浸かるか…」

なんだか遣る気でないコトシラは、その巨人のような足取りで湯船につかる。

まだまだ、呆けている。あどけなさが残るコトシラでも常日頃の教訓を経て、日々進化している。

その先にあり立った物は、殺人出したなんて言えない。親にだって言えない。

姉にだけは言えた、逆に、姉がいなかったら、いつも通りの日々を過ごしていた。

誰もが言う、退屈な日々

何だろうか…体は暖かくても、心は寒いようなこの感じ…

後悔している？

とでも言うのだろうか…

言うのかも知れないな。

後悔先に立たず。

後悔する理由は一つだけ、冷静に考えてしまうからだ。

冷静に考えなければ、人は早死にするだろうし、自制心働かずに私利私欲に動いてしまうと、世界が驚異の竜巻に飲み込まれてしまう

であろう。

最後はきっと自滅。

良くできてるのか、適当に出来ているのか、分からないな、この世界。

進化し続ければ、先がなくなるから自爆。
退化し続ければ、言うまでもなく無くなる。

きっと誰だって、最後に行き着く理想は、普通や平凡なのであろう。

「つまらないシステム」

こう考えてくると、今度は逆に後悔をしなくなるじゃないか、本当に…

多分、この調子で殺人を続ければ、大量殺人者とか言われたりするのだろうか…人の未来を奪ったり、その人に関わり人間までの未来を奪ったり、…

恐らくおれは、姉を殺してしまったら、終わりだと思う。

生きてる人はみんな、終わりがあるから、俺にもきつと終わりがある。

自覚がない。

もしかすると、俺に末期の癌が見つかって余命なんか月とか、医者に宣言されたら、自覚するけど、…死ぬ瞬間って何が見えるのか。
ああ、また話が大きくなりそうだ止めよう。

とりあえず、次、殺す人間かは親だと言うことは、決まりだ。
弟が居なくなつて真つ先に、気づく人間。
おれを形作ってくれた人。

コンコン

すると、外から密室の空間に、ノックを下す音がした。

ふと、

「なんですか？」

意表を突かれた感じに、間抜けな感じで訪ねたおれ。

「私だけど、ちょっと質問をして良いかしら？」

姉でした。

おれは、ほつとため息をつき…別に、誰か違うお人が訪問しに来た
とは思わなかったけど、…安心感があつた。

「なんでしよう？ 質問とは、ここで話すつてことは、それほど重
要視無作為…」

火照つて、言葉が可笑しい。

けれども、冒頭部分だけで話が繋がつたらしい。

「あの弟の袋なんだけど…」

弟の袋とは、主に黒いビニール袋だ。破けやすいのは確かだ。

「袋がどうした？」

「ないの。どこかに、捨てたの？」

「無くなったのか…なら、それはそれで処理の手間が省けたな。気にしないで置こう」

きつと第三者が丁寧に、森に捨てに行つたことを祈る。

「どこに、ゴミ袋を捨てたの？コトシラ」

おれに問いかける姉。正直真実を言って、おれはゴミ袋の在処など知らない。なのだが、姉はおれをとにかく、しつこく訊いてくる。おれには、俺の対応の仕方と有るが、風呂場まで入り込まれてくると堪忍しきれない。我慢の沸点だ。

タイルに転がっていたポリバケツなんかを転がしたときは、最後となるだろう…姉。

僕がせっかくにも、冷めきったお湯を盛大に頭からかぶるのを楽しみに、冷ましておいたお湯だぞ。ここまで冷めるのに何分かかったと思うんだ？ 10分弱か、15分強か…

とコトシラが被害妄想に浸っている、さなか、満を持して、案の定。

「あら？ コトシラ、これは何？」

ポリバケツに触った。と言うか、触れて中の貯水された水まで触れて窘める。

「ポリバケツ触るな！」

思わず口から零れ出た叫びだった。これでお障りが続けるのなら、おれは、おれの拳で姉を殴り殺すかもしれない。

「あ、血がまだ、タイルの上に、はびこっているわよ？　流してあげましょう。」

と言うと姉は、ポリバケツに含まれる、ほぼぬるま湯をタイルの上に垂れ流した。

じよっばー

艶やかな水の滴りと、排水溝へのかすかな轟音とが入り乱れ、おれを破天荒のさざ波に誘ってくれた。

「これで綺麗よ？　コトシラ」

姉そう言うのだが、

妖艶までの凛々しさが俺をことごとく、鬱伏せる。

「う、うん、綺麗だね。タイルの美しくなったし、それに、姉もとっても美しいよ。惚れてしまいそうだよ。大好きだ。」

言葉とは反比例とおれの心は、紅蓮色一色。いまにも、口からさつき食べたピザが吹き出しそうな勢いだ。

おれの…楽しみが…

もう怒りを通り過ぎて、姉の胸に飛び込んでしまいそうな勢いだ。だが、今のおれは全裸で防御力零度だ。それに、裸で姉に飛びかかるなんて構図、恥ずかしすぎて、生きてられない。

…それに連動して、恥ずかしさのあまり、姉を殺しかけない可能性だって、零ではないんだ。殺しかける方が断然高い。

もうおれは、人を殺める事に対する罪悪感への免疫力がついてしま

っているのだから…

「あなたの性癖なんてお見通しなんだからね。あはは」

何を言い出すかと思えば、これまた、心無き心を抉るお言葉。この人は、本物の姉なのだろうか？ 先ほどの『袋が無くなったやつてるわよ？』辺りからから別人へと進化しているのでは、なかるうか？

いや、専ら嘘ですから、本物の姉ですから、根強く許してあげましよう。

「一言言いますけどね？ 姉、おれは最後の一時に、盛大に頭上から冷たいお湯をかぶってまた、湯に浸かるのが趣味だったんです。…どうしてくれます？」

許すけど、詫びたる見返りは求めます。おれは悪い子ですからね。

「まあまあ、コトシラ？ あなたは何かを知った気である様だけけれど、私はあなたが風邪を引かない為にも、やった姉の思いやりだったのよ？ それに、あなたは風邪で一度死んでいます。」

最後の締めくくりが妙に悪寒が走る。

彼女曰わく、姉は何を言っているのでしょうか？ …触れないでおきましょうね。

「おれは死んでなんかいないし、この程度で風邪を引くとは思わない。…現に、今の今まで続けていた習わしだ。耐性はしっかり、保たれている。」

風呂場のタイルに裸足で姉が立っていて、おれがそれを見上げるよ

うな立ち位置だ。おれは、浴槽につかるだけだ。

「…あら…そう、そうね。自分のことも大切に出来ないから、人を葬ることが出来た。あなたは立派な殺人者よ。そして、私も…だから、まず取り敢えずは、体だけは大切にしてお願ひ。」

ん？実にさっぱりしない言い回しだ。元々から何か、抜けているような物言いばかりする姉だけど、ここまで解読困難な出題はあっただろうか？

要は、今後これからも殺人に没するおれたちは、体調管理をしつかりしろと…そういいたいのか？

…矛盾だらけだが、姉らしい意味合いではある。

「う、うん、わかりました。おれはこの日から、ぬるま湯を自虐的にかぶるのをやめます。」

その代わり、おれにも端的に提案一つ述べて頂かせて致します。

「…その代わり、教えてくれませんか？」

腑に落ちない事がある。

「何かしら？ 唐突に…」

「どうして、姉はこの浴室の敷地に入ってこれたのか不思議なのです。教えてください。」

しょうもないこと言うのがおれだった。

「どうしてって、それを今ここで、そして、交換条件で訊いてもい

いのかしら？ 損しますよ？」

それでも、無償に聞きたい。なぜ、その様になってしまったのかを、普通自然界ではおかしいこの状況を、

「あなたがこのような趣味趣向も持っているのかと思ってたけど、違うの？」

「え、よくわかりませんが…」

「なら、これは癖なのね。悪い癖」

「に、日本語で喋っていただけます？」

「鍵は、かけるべきよ？コトシラ」

「ええ?!、鍵が最初から開いていたんですか?!」

「掛かってなかった、言ってくれる？」

おれは驚いてた。否定、驚かされた。驚愕の一途を辿る。まさか、生まれてこの方11年間、その癖が定着してなんて…

道理で、ゴミ袋も盗まれるはずだ、…そして、盗んだのは犬だな。事件解決。

「なんだかありがとう、姉、おれまた生きる勇気を貰いましたよ。」

「手遅れだけどね。」

その通り、手遅れだった。手遅れでもいい、所詮、後先後悔するも

ので過去は変えられない物なのだから、

「手遅れ、…手遅れなら、告白しても良いかな？ 姉」

「言ってもいいんじゃない？ 私自身には、どうしても言い話だけど…」

「どうしても良いならやめます。そして、そう言う姉が大好きだ。結婚してくれ」

浴室でなんてことを言うのだろうかと思えば、年齢的に全然許される領域じゃないかと、抑制効果。

「言うことはいつたの？、なら、用事は済んだと思うので、行くわね？」

あっさり居なくなってしまった。

と、おれもなんだか興ざめで、これ以上浴槽に浸かることはないなと、最後に色々済ませ、浴室に手をかけた。すると、不思議なことに、鍵が掛かっていた。内側からしか掛からないタイプの奴で外側からは、十円玉的扁平な道具を取り扱わないと開かない構造になっていたのである。

それを外側からなんの仕草もなく閉じたってことだ。

「手品か…いや、魔術だ」

杓文字といい、この手品といい、彼女には何かの力を秘めているというのか…怖ろしいを通り越して、一度で良いから杓文字で殺されたいと思った。

と、同時に、『おれの殺害者は姉で凶器は杓文字だ』とも、願った。
叶わないであろう夢である。

コトシラは、いつもそこにある、パジャマに手をかける。パジャマ
と言うから、それらしいものだと思えば、ただの黒一色の闇に埋も
れた色彩の服装だった。

黒い服はよく寝れるの理由で、母に買わせて貰った。何着も予備は
ある。

それにもう殺人者なら、こんな言葉たって使える、「ついても血が
目立たないからな……」。

いかにも、犯罪者つて陰気がぷんぷんするから、言わないけれども、
なんとなく、黒は陰鬱で灰色だ。

いかんいかん、言語が誤った。今日はもう疲れているみたいだ。

「今日の夕食は何かな」

過った言語で陰鬱で灰色と、脳内で肯定してしまったが、おれはそ
んなことより、姉の夕食が食べたいと思った。

コトシラは歩く。床を

「美味しいかもしれない」

夕食は、語彙では伝えられない何か。しかし、その食べ物は思っている以上においしかった。

「初めて食べる人はみんなそういうわよ？　あなたも一般的な味覚の持ち主だったのね」

と姉は言うが、それは正しい発言かもしれない。おれは、初めてみるこの食べ物を非難していた。見た目がとても不味そうだからと言う理由だ。でもしかし、こうして食べてしまつて、うまいと評価するおれは、単なる食わず嫌いの考え無しって人種に分けられそうだな。

それを一般的と評す姉は若者、おれはまだまだ子供だ。

そうやって、食卓に出された食べ物を味わいながら、この食べ物の原材料を訊く。

「これ？　何使っているの？　病みつきになるほどうまいんだけど……」

何をこの食べ物に交合したらそれだけ、うまくなるのか知りたい。

「ふん、知りたいんだ。」

姉は僕の顔だけ見つめて、手を食卓に乗せ、上半身もたれかかる。だらけているというのか、サボタージュしているのか、とてもだしがない。

「知りたいですけど、どうにか、その凭れ掛かれ感どうにかしてくれませんか？ 誤って、姉の顔にこの食べ物が掛かってしまいそうです。」

だらしない姉みるは、気が引けるが案外それでも良いかな？ と思うたりする。そもそも、気にする方が可笑しい。

「…どこまで知りたいの？ この食べ物の真相をどこまで知らしめたいの？」

それは姉が知る限りすべてだと思いますが、おれには、話を聞くだけで何かが滅んでしまいそう…そんな根拠のない予感までもした。

「全部。と言いたいけど、何かが怪しいんですね。」

警戒しつつも、軽快に答えた。

「何か、知ることに躊躇っているの？ 大丈夫よ、別に、人肉なんか使っちゃい無いわ。」

「それですよ！それですよ、おれが気になっていた疑問は、…弟が入っていたら、どうしよう…とか思いましたし」

安心感、弟を殺したおれでも弟を食べたいと思うまで落ちてはいない。おれは只、弟が憎かったただけだ。好きだったわけではない。どちらとも同じコトを言っているようだが、否定を押します。

「材料に加えようかな、と思いはしたわ。けど、コトシラのコトだから、ここは避けようと思ったの。」

弟思い！ けど、おれは弟殺し。

「考えているのか、姉には勝てないよ、一生。」

姉はやれば何でも出来そうで、完成された人間だと思っていた。けど、それをうまく利用できていない気がする。人との関係だけが最大の難点と言うか、それが全部を駄目になっているというか、動ける世界を明らかに狭めてる。

この場合、人間関係と言うより、人間恐怖症と言うべきなのかもしれない。

おれは、わざわざ人間との距離の取り方から観て、人間関係と言っている。

「？勝てる日が来るんじゃない？ 一生なんて言葉がより説得力を低下させている様なものだし。」

一生って言葉は、重い言語だと思ってたが、違ったみたいだ。

「じゃあ、勝てない、二度と」

お世辞めめれな口語を並べるけど、それだけ姉を信頼し、認めている。

「下手なお世辞は止めなさい。照れてしまったらどうするのよ？」

「どうもいません。」

照れてしまったら、おれが殺します。

そして、コトシラは食べ物を食べる手を早める。

むしゃむしゃ

「ごちそうさまです。姉？、姉は食べないんですか？」

何となくだらけている姉に訪ねる。

姉が食事を行っている姿を今まで観たことがないから、どのタイミングで食べているのか気になる。

「え、私はいらないわよ。その食べ物不味いから……」

「自分が不味いと感じる食べ物をおれに食べさせたんですか？！」

衝撃を受けた。どこに衝撃を受けたかというと、ここまで美味しかった食べ物を不味いと言う姉に驚かされた。

「大丈夫、心配しないで、毒味はしていないけど、食べても腹痛や死んだりはいないわ。完全に安心できる食べ物よ。」

「姉も食べてください。是非」

「嫌よ」

おれは腰掛けてた椅子から立ち上がる直前に意表を突かれたため、

上から姉に怒鳴ってしまった。それで居て、姉は食卓に置かれていた歩く玩具のねじを回し、歩かせ横から見ているだけだった。

観ていると本当に、氣力が感じられないので、

「おれが、皿を洗いますね。姉ばかり頑張つて、ずるいですから」

コトシラはそう言うなり、てくてくと、台所の流し台に向かう。

「あ、コトシラ。コトシラが洗ってくれるの？ 助かる限りね。流石は私の弟」

などと、氣の抜けた生氣のない一言を歩く玩具に言った。

：顔見なくとも分かる。姉は目が虚ろな彩りなのであろう。いつもそんな感じだから、おれには分かる。

「姉、眠いのなら、部屋にでも籠もつて、眠っていれば良いじゃないか？ 疲れているようだし。」

人というだけで疲労がたまる姉の體質もそうなのだが、こんな體質にした親共が憎く思う。

想わないようにしているのだが、おれは姉が好きだ。

親を殺してしまうくらいに、

「そうしようかしら、もう少し頑張ってみようしたけど、無理みたい。」

弱々しく姉が言うと、覚束ない足取りで、部屋へと歩く。ふらふら安定感のない足取りに、不安が残るが死ぬわけではないので、そつとしてあげた。

おれは、こうして、皿を洗うことに没頭したのだ。

姉が部屋に戻った後、おれは皿を洗うついでに、ゴミを出すことにした。

夜に、ゴミを出すなんて、おれらしくて、良いと感想を言ってみた。

静かすぎる家の中、玄関へと続く廊下板を歩き、ゴミ袋を片手で運ぶ。

外は勿論のコト、暗く街灯と住宅の光しかない。外は曇りで月も目に映らない。

靴を履いて、外に出たコトシラは、弟のしなんて、無かったように歩いて見せた。

いつもどうで、何もなかった日常となんら変わらない表情で…

歩くのを繰り返すコトシラは、近くにあるゴミを集める場所にたどり着いた。

なんら、中途半端な季節だったため、黒服パジャマだけで、ここまで歩いてきた。

辺りに人の気配なんて無い。この時間帯は、いつもこんな感じな為、何かを予感させる違和感なんてものはなかった。

けど、逆に当たり前すぎて、俺自身が異常なようにも見える。

それも当たり前だ。おれは人を殺したのだから…

「ん？」

ふと、ゴミを捨てる場所に、何やら、観覚えるの有るゴミ袋が目映った。

弟を詰めた黒いビニール袋だ。

どこかの国なら軽く、死体詰めのを袋を遺棄してしまうと、すぐ見つかってしまうのだが、この世界は人が死ぬのが当たり前で殺した所で別に、そう言った重い罰を受けるわけではない。

この世界のルールは、人を殺せば、殺した人間を殺しも良いと言うものだから。

おれはもう、誰かに殺されても、その罪を向ける人間はいないってコトだ。

よくできたシステムだ。その所為あつてか、殺すこと事態が馬鹿馬鹿しいいくなってくる。

人の値段が下がると、技術も進化しないって言うけど、本当に進化していないよ。この世界は。

この俺が住む国の王様だつて名前も知らないし、ここが国という敷地に囲われていたことだつて、つい最近知った。

とそんな話はいいんだ。

弟の入ったビニール袋がなぜ、こんな場所に合るのか、一番その疑問が知りたい。

どうして、ゴミ捨て場にゴミがあるんでしょうか？

なぜ、このゴミがここにあるのでしょうか？

このゴミは、ここには在ってはいけないもの。

何故なら、これはゴミではなくて、先程まで家族だった物だからです。死んでしまったら、家族ではありません。只の死体です。動いたりしないから、只の生ゴミです。

そんな事は分かっています、どう考えても物理的に不可能なはずですし、第三者がいるとして、ここに捨てる意味が分からない。

どうして此処だったのか、何故、おれがこれを目撃したのか、意味が分かりません。

言うなれば、これは異常現象。台風がこの町に襲来するのよりも、もっと低い確率でこのゴミと遭遇。陰謀としか思えない自然現象。

頭がおかしくなりそうだ。

違った、頭はすでに、おかしい所まで落ちている。人として人で無しなのです、おれは…

いかに巧妙なトリック？ 有り得ません。これは、偶然と解釈した上での運命です。

こうなるように、企みが闊歩したのですね。誰かが、

疑われるのは、姉。でも…

おしゃれな割烹を着ていた姉がここまでの距離、運びに来るのだろうか？

時間的に余裕が無い。姉は俺が体を浴槽に浸していた際、おれの様子を遊び半分で伺いに來ていたのだから、そんな暇は無かったはず。あの食べ物だって作るのが無理に等しいくらい俺と話をしていたはずだ。

「考えて無駄だな」

今まで、何を頑張って、頭を働かしていたのでしょうか？

そこに死体があつて、死体は歩かない。此処にあるのは自然界的不可能だ。そこに在るのは良いとしよう、そうして、今日偶々見つかると言つ低確率の遭遇。

考えて、解決しますか？

しませんよ。おれは、探偵ではありません。殺人人間です。

壊すだけ取り柄となつてしまったのです。

何も知らずに、芸術品を意図もたやすく壊す赤子。知らないから、分からないから許される。

知っていて、物の価値が分かるのに、壊す愚人。言い切りたくないけど、他人ならそう言う。

コトシラは、何事もなかったかのように、くるりと状態を翻し、もと来た道に目を向ける。

さつきも、解説したけど、空は曇りだ。星なんて見えない。星が見えても、無数の光は、目に映るだけであつて、光を映し出されてい

るだけだ。…つまり何が言いたいと言うのなら、結局、いつも観ている夜空しか、そこには無いって事になる。

いつも通りじゃなかったのは、曇りの空の方でした。

「暗いな。街灯の光が眩しいくらいに…」

街灯は、ほぼ同じ等間隔に配置されている。車はいっさい通らない、この道は、歩行者専用となるのである。整備してくれたおれの知らない人たちの力。今、ぽつりぽつりと、転々としている街灯たちに便利さと有能さを感じられるのは、人たち先人の知恵と、この今の状況下が…ピッタリ、リンクしているからなのかもしれない。

誰もある来やしない、道に街灯などと、電力の無駄遣いだろ？

あ、いや、ゲームする事態、電力と社会的時間の無駄なのは知っているよ。

…要は、今現在のおれが便利だと思えばそれでいいのか、街灯ないと怖くて道歩けないし、外にでるのも恐れるよ。

コトシラは、歩くペースが行きよりも帰りの方が早いことに気づく。気づくけど、ゴミを捨てて何も負荷が無いことに、改められる。

どうでもよかった。

体が軽くなったというのなら、大袈裟だけど、確かに、歩く歩幅と歩く速度が上がったと言えば、上がっている有り様だ。

ゴミを捨てるだけで大層に、変わったりするのならば、おれは此処でこんな事をしていなかったのかもしれない。

人が人として、誰かのように変われたら気が楽で、今までのように、人を殺めたりなんかもしなかったはず。

確信はないけど、保証はできそうだ。

歩くのは楽しい筈なんだけど、雨が降ってきた。初発から、雲行きが怪しかったが為の行いともいえる。

そうは言えないけど、何となく感じるそれだ。

「やばい、濡れる」

いきなりの事ではなく、前々からぼつりぼつりと、街灯と同じテンポで降っていたのは、今更ながら解説させて貰う。

雨が降っているのだ。

走って、さっさと帰ってしまえば良いものを、あのゴミ袋ごときではばからったのは確かだ。過去に失墜を覚えるのは、しゃくに下すので、省みない事にした。今してみた。

雨に濡れる。

まだ、本調子じゃないので、まだまだ安心だ。安心できる。安心しないといけない。風邪をひいたら、姉が困るであろうし、おれも困る。

明日は、親を殺さないといけない大事な日になるし、哀れに風邪をひいたら、姉だけ頑張ってしまうし、活躍もできない。

雨で頭が濡れるの事態、危険性があってやっかいなのに、どんどん

雨が降ってくる。

「本当お願い、黒いパジャマがびしょ濡れになってしまつよ」

貧弱で軟弱な言葉を雨の夜空に訴える。考えるまでも、想像するまでもなく、雨はコトシラの体を容赦なく叩きつける。

もはや手遅れ、討つすべ無しに見えたが、一つだけ提案があつた。

「家つて、こんな近くにあつたの？ 驚きが舌包みだよ。」

我が家に潜り込んだ。

本当に近い場所にゴミ捨て場が在つたため、雨が降ったところで申し分ない距離を誇っていた、我が家には流石の天からの濁流も討つすべあきたらずって感じにまで、無能だった。

雨が下す、天罰はおれには無効と言いたかったのだけれども、頭半分は湿っていたので互角と判断された。

俺自身に、

突き当たり、角を真つ直ぐ行つた先にゴミ捨て場は存在するから、もう、一言ですごく近い。

何、長々と歩いていたのか？ 語っていたのか、自分でも分からない。けども、

頭は濡れている。

「頭半分ごとき、気にするにも当たらないわ。」

おれは、頭が絶妙に湿る髪をカサカサと書き散らし、自分の寝室に

足を進めた。

俺の部屋…とは、言いたくもないが、言うしかないのかもしれない。弟が死んだ、この事実を直視するのなら、おれの部屋になったのだと言おう。…けど、おれは自分専用の部屋なんか欲しくないし、一人では夜、寝るのが寂しい。

今更は、絶対的に今更なんだから、どうする宛もない。

おれは、弟は憎かったが、弟の温もりは好きだった。

全く、専ら、聞く話、兄より弟の方が賢く大人びると言われるが、言われるとおり、弟は俺より大人だった。

落ち着いていて、人思いで、みんなからも親しみ敬れていた。言葉は変だが気にするな。

んで、おれも寝るときは必ず、弟を枕にしたり、抱き枕にしたり、ベッドにしたり、日々、充実した快適な眠りについていたのだから…みんなのヒーローと恥じるくらいの存在だった。

おれが殺したけど、もういないけど、ただの人肉になったけど、

弟は、おれにも絶大な何かをくれた。

コトシラは、自室と化した、部屋に足を踏み入れ、電気をつける。

パチ

すでに、寝る支度は整っていた。皿を洗い、歯を磨き、うがいをし、手を洗って、ゴミをゴミ収集所に置き、雨に濡れ、そして、寝室である。

此処までの道のりですごく、どうでも良い話をしたのは、街灯だった。

日記に書こうかと思ったけど、ブログに書くことにした。…てか、ブログにもかけないか…ネット環境整ってないし。ついでに、言つと髪の毛も湿って整っていない。

「寝るのが寂しい…」

静まり返る寝室は、凍てついた雨の音と同化して、凍りついた雰囲気醸しそそり出していた。

『寝るな』と悔やまれるくらい。『寝たら死ぬぞ』と、甚だしく罵られるくらい。

寂しかった。

人の殺せる世界に誰がしたんだ？

僕だって、そんなのいやです。

殺されるのは、構わない。だけど、殺す人間の方がかわいそうだ。人を殺したから何だというのですか？

僕は思います。殺される人間はどんな理由で殺されたのか、知りませんが、殺されるのは本望だと思うのです。

人は、死ぬのが当たり前ですから…生き物は死ぬのが当たり前ですから。

どうでしょうね。死なない人の気持ちは…

問題なのは、殺した人間を生み出すこの世界だと思います。人が悪いのか？ いや違います。

環境が悪いだけなのですよ。多分、…

人は環境に適合し、人間関係も、人々つながり合いで変化する。

僕を、選んで殺し人が可哀想だ。

どうにかならなかったのでしょうか？ 助け舟を彼に譲る人は居な

かったのか、…彼と言っても兄だけど、

本当に残念な気分させます。

死ねない僕も、殺した兄も、

どこまでも、甘い姉も。

僕が死ぬとも思っ、殺していたのなら分かります。しかし、姉は何故、僕が死なないことを分かっておきながら、僕を殺したのでしょうか？

疑問です。

兄も兄で、僕を殺す理由が分からない。殺すまでに憎かったとして、実際に行動を起こすとは思えません。

…今の状況からは説得力がありませんが、それでも、姉が凶行を促したとしても、兄が兄自身の決断で僕を殺すとは思えない。

僕の兄は、人を殺すような人ではないと思っていた。

この信憑性のない言葉は、僕が兄を信賴して、信用していたからいえる答で、僕自身が兄の弟だからたどり着く答えと思っていた。

僕は兄を殺してしまいたい、思ったことはない。

僕はいつだって、どうにかやってのけたから分らないのかもしれないし、人の心をすべて理解するとかさえも出来ない。

今までうまくやっていたのは、僕のおかげですらない。

うまくやっていたのは、偶々だった。偶々、成功して、偶然、此処まで成り上がってこれた。

僕は人気者でも、勇者でも、選ばれた子でもない。ただの凡人だ。死なないだけの只の凡人。

死なない事で、すべてがうまくいっていたのかな？

簡単に死ぬ人間は、選ばれたり、勇者だったり、人気者で在ったりするのか？

分からない。ますます分からない。

ザザー

外は雨が降っている。外というか、袋の外側。

僕は、袋の内側にいる。

僕の次の人生は、袋の中から始まるらしい。

狭いし、息苦しい。でも、死ぬわけでもないし、外にでると雨で濡れる。

これからどこかへ、行く宛もないし、僕はそのまま居た方がいいのかもしれない。

考えた先には、そのまま居続けるに定着したらしい。僕はそまだ。動く事しらすない。

雨で、袋の外側をうつ。触れているような感覚で、塗れているようにも思えるのだが、実際は触れてもいない。

どうしてか、寒くもない。感覚が麻痺しているのか、また死んだのかは、別の話だが、とりあえず、じっとしておこう。

何もなく、何も見えなくて、何かを考えているなんて、最悪だな。僕の人生は最悪だ。恨む訳にもいかない。恨む対象が分からないから、

誰に、せがめばよいのかも、分からない。

分からなすぎる。何も、知らなすぎる。

一つに、何度死ぬ苦痛を味わえばいいのか、分からない。

僕は、どこに進むべきなのか、分からない。

僕は、今どこにいるのか、知らない。

勝手に決めても良いけど、絶対に違う場所を断定する。正確さを求めたいのなら、この目で確かめればいい。今いる場所だけは、掴めるはずだ。

どこなのか分かるはずだ。

でも、雨には濡れたくない。

風邪など、ひきたくない。その前に、ひかない。

ひかないのだけれど、常識を考えて、雨に自分から濡れに行くなどはない。

濡れたくないのは、嘘で、本当は。

濡れることはしたくないのが正しい感情。

僕は、常識を正しいとは思わない。

人が迷惑するから、常識を覚えるのは、正しいようだけど、迷惑かけても良いじゃないか。

他人が困り果てようと、自分が辱め受けようと、その話自体が何だというのでしょうか。

基本、何でも出来てしまい、何だって出来るこの世界で何をしようが、自分のためでしょう。

他人に流されて、他人と同じになって、自分じゃなくなるとか、みんな思っているだろうよ。

綺麗言は、正しくないし、戯れ言は、上辺言だけで中身がないし、一番、より一番優れているのは、理解されない言葉だと思います。

入って、自己中心的だから、他人にも優しくできるように出来る。自分が大切だから他人を救える。

意味の無い言葉など、この世にはないと、大前提する神様がいますと
して、僕なら真っ先に、意味の無い言葉をいいます。

反抗精神とかでもなくて、言われるがままに、こなしたりとかして、
他人になってもいい。

…僕は、偶々、言われるがままに、流される人間になっただけです
と答えます。

一つ気になりました。

何を語っていたのでしょうか？

意味がないことでした。

言いたいだけって感じでした。

僕は、これから何をすればいいのかを、考えればようのに、別のこ
とを考えていた。

意味なんて、最初からありませんでしたね。

僕は、その場でじっとするだけです。

明日になるまで、雨が止むのを待つだけ。…雨が止んだら何をしよ
う？

一度、家に帰って、兄を殺してみようか？

それは出来ませんね。兄は死んだら終わりで、もう、会えなくなっ
てしまいます。兄の体は腐ってしまうだけです。

僕も人間だから、兄を失いたいとは思いません。

逆に、弟らしく、兄と一緒にいたいし、もっと話したいです。姉だ
って、僕を嫌って避けているけど、本当は、殺したくなかったはず

です。殺してみたかった。とかは、思っていたかもしれませんが……コトやは、袋から外にせずに、ずっと、雨が鳴り止むのを待っていた。

まさか、杓文字でトドメを刺されるとは思いませんでした。木製の立派な杓文字。

中から、刃が出て来るのなら、理解も出来たけど、内蔵を抉り、喉を潰して、氣道を阻むなんて……

想像しただけで恐ろしい、技です。

姉はなんで、あんな特技を身につけているのでしょうか？

一番の不思議です。死なない僕よりも不思議。

僕は、死ぬほど努力しないと、特技を身に付けられませんし、努力しても限界があります。

しかし、例外が如くでどうしてか、姉は何でも出来る。

分からない。輪廻をわたりかけて、その技術を覚えているのか、はたまた、最初から出来てしまうのか……

凄い以外の言葉はでません。凄いくらいに……

姉は、人間を観察していたりするのかもしれない。兄を利用しているのかもしれない。けども、それは多分ないと思う。

姉がそんなに頭がいいとは思えないからだ。頭が悪いようで、何も欠けていない感じもする。

僕と比べものにならないほど、頭が悪そうだ。家で引きこもって、豆腐や南極などを書いている間抜けさだぞ。驚かされるの何者でも

ない。

曲者だと言いたかったが、姉はそこまで危険人物でもない。遊んでいるだけかもしれない。人生を自分なりに楽しんでいるだけ、僕と正反対じゃないか…

道理で馬が合わない。

そうか、姉はバカだったのか。感心するあまり、涙が出てきそうだった。

姉は姉らしく、そのままで居てくれたらいいのに、兄に変えられてしまいそうで心配だ…

意味など無いけど…

弟はとりあえず、雨が止むのを待つ。

朝がきました。

おれは、昨日からよく眠れた感じがする。昨日は、なんだかんだで
すぐ眠ってしまったし、今日が来るとは思っても観なかった。

あれは夢だったのかと、眠っている最中に、思っくらいだったから、
…それほど、今日は普通とは違う今日が来ると、覚悟はしていた。

何でもない、いつもの朝だった。あれは夜だったから、心がテンパ
っていたのかもしれない。

テンションがいつもと違ってたのかもしれない。
が、言うまでもなく、『弟がないこと』だけは確かだ。狭くもな
い二人分だとちょうど良い、この部屋に一人、弟が消えただけなの
だから…

消えたのだから、広く感じてしまう…だけだ。後は何一つ代わりの
ない、毎朝の朝日がカーテンを照りつけている。

それを伺って、朝だと気づく。いやいや、目覚まし時計を観れば、
すぐに朝度と、気づいていたが…気分的な悟りを持ちたかった。

コトシラは、敷き布団から体を起こし、上半身を捻ったりしながら、
体を起こした。体操とは違って、体を慣らすだけの習わしだ。

「今日は、良いことなさそうだな…」

気分は良好ですが、何か、いつもとは違う調子を掴んだ。

体がダルいわけでもない。第六感が在るとするのなら、そこをくすぐる何かが、…感じ取られる。

正直、生半可な感覚神経なので宛にも出来ない。

「気にしないにこしたことは無さそうだ…」

違和感の深層心理を追求することをやめたおれは、布団から飛び出し脱出した。

そして、三回に疊んで、はい終了。

コトシラ最後に、足で部屋の隅まで蹴り押して、放置した。

これからのプランを考えるコトシラにとっては、こつやつて手間を省くのが最善と思えたからだ。

「…姉でも起こしてくるか。」

姉はまだ寝ているか、それとも、深夜から絵を描いているかのどちらか行動種しかない。

あえて言うのなら、姉は、暇な人なのだ。

どちらにしろ、寝るくらい時間があって、絵を描くくらい時間を持て余しているのだ。

今日は…多分。

「寝ているな。七割型寝ている…」

昨日はあんなに、疲れている顔をしていたが、打算的にそうなるのが妥当。

こういう場合の対処法は、寝ている姉を起こすのが妹の役目だが、弟でも辛うじて免罪の位置にいるのなら、姉の寝顔でも愚弄してこ
うか。

と、俺は思う。

姉は、でたらめに紙を布団にして、段ボールの上で寝るから、いつも親父に起こされるんだよな。

母は観るに観枯れて、何も言わなくなった。呆れているを通り越して、勝手にしてなさい、放置、の領域だ。

それでいて、親父は妙に情に厚い人だから、そんな姉を現実世界に引きずり込もうとしているんだとか。観れば、滑稽に移る家族物語だ。クオリティーの高いままごとですね。

確か、に。さらに考えても、今、寝ている。昨日、弟を殺すときに木製のいすを使って、やったから、姉は作業が出来ない筈だ。いつも使っていた、木製の椅子…砕けるときは潔く呆気なく砕けた。

今思うと…姉はあの椅子を大事にしていたか、愛着を持っていたはずだ。

ずっと使ってきた、椅子だぞ？

おれには、価値が分からなくても、姉なら重みが分かるし感じられるはずだ。

なんて、とんでも無いことをしたのでしょうか？

後先考えない俺でも、少し気を使っておけばよかった。おけなかったけど。後悔だけど、あの時は、考える暇もなかった。

…いいや、知らなかった事にしよう。
姉なら許してくれるし、嫌われても、良い。殺してしまうだけだから…

と、おれは、歯を磨いたり、顔を洗ったりして、顔全般を清潔にした。

別に、汚い、汚らしい顔で目をつむる姉を仄めかしてもよかったのだが、それは、机上の空論のように、叶わぬ夢だ。

姉に嫌われるのは、本当に怖い。

理由、今まで嫌われて、こなかったから、生きてきて一度も嫌われたこと無かったから、本当にシスコンなおれだから、それだけは譲れないのだ。

てくてく

階段そばまでたどり着けば、薄暗い階段が二回へと続いていた。朝日はまるでない。
怖い。

いや、全然怖くない。むしろ、愛くるしい。

とことこ

効果音を撒き散らしながら、一步一步、確かに足を踏みしめる。踏み外して、頭打って、死ぬ運命だけは避けてみたい。
その前に、訪れない運命だけだね。

「姉」

階段を上る最中に、姉を姉と呼んでみた。声が女々しく、声が届くほどの大声ではなかったため、聞こえてはいない。

只者面で、呟いてみただけです。

姉姉姉。

ようやく、姉の部屋の前までたどり着きました。ゴクリと、開けるのをためらいます。扉に、『あねです』と下手くそな姉の字が掲げられた札が欠けられていました。

中には、姉が居るとして、躊躇う俺が此処にいるのなら、いつそ、あの階段で落ちて死んでればよかったのです。

死ぬのは嫌いですが、そこまで生きようとも思わない。

心臓が高ぶる？

高ぶったりしないけど、この流れる空気が嫌いだったりする。誇りとか、陰気な廊下とか、錆び付いたドアノブとか、二階の階段と廊下を繋げるこの空間には、窓すら開きません。扉が二つ開いて、俺の後ろにもう片方の扉があるので。

一つは姉の部屋ですが、もう一つは、倉庫になっています。使われない物物が散乱する物置です。

幼い頃中を覗いたりしたことが山ほど在りますが、五年生になったおれはもうそんな事はしません。

好奇心が薄れている証拠。

大人に成っていく、実感…

あ、いや、

おれは、なんて事を思っているのでしょうか？

まだ五年生で、全然全く、子供です。馬鹿馬鹿しいとかその前に、自分の立ち位置をわきまえていません。

子供ですね。

ガチャリ

勢い余って、ドアノブを半回転しさせてしまった。おれのせいでドアはみる観ると、開いてゆく。

そこには、身を疑う光景が部屋いっぱいに、広がっていました。

姉が死んでいたのです。

血が部屋いっぱいに広がって…

嘘です。普通に床に転がって、寝ていました。俺は何も変わらない姉を観て、ほっとため息をこぼす。

「姉！ 朝ですよ。起きてください！」

姉の被っていた、紙の掛け布団を蹴り飛ばして、かぶっていた布団を蹴り飛ばした。

ガシヤリ

勢いが加速気味に、冗談無しの慣性の法則だったため、蹴り飛ばし

た紙は立て掛けている筆入れとパレットに衝突した。

姉は一方、ぐっすり死んでいるように寝ています。

「姉、起きてくださいよ。」

おれは、姉のわき腹を握りしめて、揺すった。寝顔が不満そうな顔をするが…

「？レモンティーが、絵の具の代金と差し支え無しで、為替市場上昇気流？」

寝言が飛び交った。

「姉！」

ギュリリ…

わき腹をこれでもかかってくらい、殺して内蔵を刺身にしてしまうくらい絞った。

「いたたたたたた、いたいの、止めて…」

起きた。

飛び跳ねるように、起きた。

「起きていますか？ 姉」

甘えてなどいない。悪魔で、喧騒と激化する表情を孕んで、訪ねて

いたのだ。

「なに？　いつもと変わらない、朝でも迎えて、寂しくなったの？」
キャラが瞬時に戻った。流石は、姉だ。眠っている時は何時だって、無防備なのに、意識があると人と距離を置く。
だから、親父が弄ぶわけだ。

「寂しくは、なかったですけど、やっぱり、もっと人を殺さないと、実感したりしませんよ」

殺して依存して、早死にするのかもなおれ…

「初めてで、それだけ、心得ているのなら、言うこと無いわね。
…合格よ」

あなたは立派な殺人者。
と、微笑ましく、笑いのだ。

あはは、

早朝は、早朝で。

親を殺しちゃいました

今回は、隣近所に迷惑をかけないように毒物を朝ご飯に混ぜて、混ぜて、安らかに、穏やかに、葬りました。

笑っちゃうほど、簡単に、そして、気がつくまもなく、速やかに逝ったので驚きようもありません。

「えっ、こんなもんなのですか？ 普通に最初から、この方法でよかったじゃん。…なんで、弟の時あそこまで難儀な殺害方を企てたのでしょうか？ 俺たちは馬鹿だったのか？」

親父の顔が滑稽すぎて、呆れるばかりだ。母親は俺たちを生んでくれて、ありがとうの感謝だけで鼻血が出そうな勢いだ。

取りあえず、泣いてみようか？

泣けませんか。弟で泣けない、おれだったのですから…

「このような物なのよ。きっと、大人を天国へ誘うのなら、力業よりもだます方が簡単って事なのね。これで証明されたかも」

と、いつもみたく、何かを計るような言い様をほざく姉だが、今回はバージョンアップしてて、片手に、杓文字と杓文字との個体二つを携えていた。

杓文字の数え方なんて分からない、おれの俺なりの表現だ。

…しかし、天国とはよく言ったものだな。

彼ら、二人はおれたちが出した朝食を何の疑いもせず、迷わず食べて、…あの母の笑顔は脳裏に焼き付いて、食に五月蠅い親父の感想も耳に残って、天国行きは確実な良い人間たちだった。

おれは違う。地獄だ。

姉も、もしかしたら地獄だ。

おれの所為になるのかもしれないけど、協力する姉もまた、姉だ。

「…姉、良いんすかね。おれの寝言を実現しちゃって、…そして、姉まで巻き込んで…」

確認はしていなかった覚えがする。今回のこの台詞で事を改めるのなら、正直に姉を殺そうと思います。そうすれば、彼らと同じ、殺された人間って事でまだ、神様は許して貰えるだろう。姉だけは…

大丈夫、そうするように、三人分の苦痛を与えるだけですから、与えて与えまくるだけで、許されること何のだから…まだ、いいのでしよう。

「何か巻き込まれたの？…私が巻き込まれたって言うの？　なら、それは勘違いね。コトシラ、私は初めから、巻き込まれたかったの。最初から」

と姉は言う。どうやら、ここで直ちに殺すことはなくなったみたい

だ。と言うよりは、殺す、前提でも、おれは姉を殺せなかったかもしれないな。

おれが殺されていたに違いないからだ。

「え、じゃあ、おれの企てを前々から知っていたとか？姉」

おれは、昨日のうちにパツと思いついたから、企てとはいわないのかもしれないが、カンの冴える姉のことだ。恐らく、おれがこの道を辿ることを知っていたのかもしれない。

ほとんど、予知能力と同じだな。

「あなたが弟を殺すんじゃないのかと、大昔から思っていたけど、
： 本当に殺すとは思ってはいなかったわ。って、事で企てていたことは知らない言うのが簡潔ね」

おれも口から出してみたかった単語なので、実際は、企てても目論みも立てていない。

ただ、そこにム力つく弟がいたから椅子でなぶっただけだ。親も同様。

「知らなかったで、いいんですね？」

「はい」

「一つ良いですか？」

話すこともないので、親を埋めるための穴を掘り進める。訊いておきながらですが、

ザヤガリ

ザヤガリ

「何かしら？コトシラ」

姉も手伝ってはいる。おれは鍬で荒削りしていて、姉はスコップで忠実に、墓穴を整えている…不器用な起用さが現れてるのか、正方形に形作られていく。
進行して、話を続ける。

「あの絵の具で本当に死ぬんですかね。人って…」

と、良い汗流しながら、単調に訊いてみた。黒色のパジャマはまだ着用中だ、この作業が終わり次第シャワーで汗を流すつもりです。

それと、朝からカラスがタカるので、生物はまだ、リビングです。

「？」

「何か言ってください。聞こえてます？」

スコップで二人分の墓穴を掘っているようだけれど、正方形じゃあ、足が飛び出してしまいそうな趣なのを彼女は知らなかった。

夢中で話を聞いていなかったのか、訊かないふりをしていたのかは置いていて、次の言葉をかけた。

「もう一度、言いますよ。姉が味噌汁に混入させたあの液体は、何です？」

分かり易いはず、これで分からなかったら、結婚しますよ。

「…絵の具と言いたいの？　あの毒物を…」

「そうです。そうです。それぞれ、…あの時言いそびれて、気がついたら親が死んで、もう今更になるですけど、…あれは一体なんですか？　あの液体は…」

長々詫びるような、言い回しを投げつけるけど、いいよね。

「接着剤とか。その様なものです…簡単に手には入る、無味無臭の毒物と思つとけば、二重丸よ」

いや、華丸あげちゃっても良いかもね…などと、悲嘆にも見える、愛想笑いをする。

あ、悲嘆は錯覚でした。朝日が高くなってきていて、そろそろ、近所が活発になるから、その不安が姉の顔と合体したのでしょうか。とんでも無い理由を付けて観るけど…

「そう…ですか。…ああ、しつこいようだけど、まだあった。」

話をせずに、黙々と穴を掘りたかったが思うように口が止まらない。一種の病気にも見える。

「もっと、しつこくして良いわよ。」

ありがとうございますね。気遣いに…

「おれが作った、目玉焼き美味かったのかな…て…」

目玉焼きとは、姉と台所で並んで作ったあの料理です。母は美味しいと言ってくれたけど、父は訝しげで陰相な表情をはぐ

らかしていた。

「母の舌は、狂っているからね。父の表情の方が下手な評論家より適切よ。」

いいね。もつと聞いてみたい。

「例えば、…父に口が有ったらなんとおっしゃっていましたか？姉の感性で言ってみてよ」

おれは、姉の表現力の力を試す一言を言ってみた。

どうでも良いけど、姉の鼻辺りに土が付いてますよと、指で指した。

「『不味い物を食わすのではないと思われる、ま…息子の料理だから仕方ないか…』とか、言いそうじゃない？」

鼻をこすりながら、声も変えずに姉の地声で言う。

下手な上手さしている様でした。

「…そろそろ良いんじゃない？ コトシラ」

穴も大分掘れた所で、姉が言葉を発する。時間にして、数十分は無言で経過していた。

「ん…あ、んん、そうだね、掘りすぎたくらいだね。」

隣近所に見つかるのではないのかと、挙動不審していたさなかに、今の言葉は、驚くべき利発だった。

つまり、『驚かすのがうまいね。姉』を言いたかったのだ。

「綺麗に、正方形にしてるね。凄いの姉の方だ。完璧すぎる姉は、あんまり好きじゃない…」

おれの口から思わぬ本音が流れ出たから、今度は自分に驚かされた。

「何を言っているの？ 私は人よ。完璧な訳ないじゃない。…そのまま、神扱いまでしたら、許さないんだから…」

墓穴のそこから、そんな声が聞こえた。

いや、おれ自体聞いてなかった。自分の言った台詞に責任をもたずに、明後日の方向に、翻して深呼吸をしていた。

「この場合、怒ればいいの？」

姉は一人、孤独感にうなだれる。片手にスコップを持ちながら。

着々と準備を整えたコトシラと姉さんは、二人係で死体を袋でごまかし、両手を姉、両足をおれと、担当する箇所をわきまえて、順調に事を進める。

「バランス感覚おかしくて、可笑しいよ。姉」

おれは、先頭を歩いているのだが、どうも身長差でお母さんが滑り台を滑っている形に、…見える。空気滑り台とは、三人係でやっと完成するのだと、知らしめられるのも、また、滑稽劇場だ。

「あなた、毎朝、牛乳飲む習慣はどうしたの？」

「飲んでも、伸びません！」

別に、背外低い訳じゃないんだ。小学生の平均身長を知らない姉がわるいんだ。

「牛乳嫌いな？　ダサいわね」

「牛乳の絵は描けるのに、牛乳飲めない人に言われたくありません！」

そう姉は、牛乳が嫌いだったのです。

「ミルクティーなら飲めるわよ。」

だ、そうです。

父を穴に備えて、埋める作業をしました。

母を先に埋めたのですが、母の体は意外にも、背が高く…など言いますか、墓穴に留まることを知らないと言いますと言うか…半分に曲げて、収納したため、その隙間に、父をはめ込むのが困難だったと言いたいです。

此処までの話、父はこの歳にして、体育座りを虐げられる結果になったともいえるのです。その体格に似合わない、体育座りはほぼ、笑いに近い埋葬になりました。

笑ってはいませんでした、姉は笑いを堪えるのが必死にも見えませんでした。

俺から言える事は、姉は昔から父に虐められていた…と、仮定されるのです。おれはつい以前の記憶が飛んでいて、基本的な感覚や生活に困らない程度の行動力は覚えているのですが、…それなりの対応が出来て、家族もこの事情は分からないかもしれないが、…恐らくの昔から、父は姉を虐めていた。

数日間で家族関係の構図が理解できた。

毎朝、父は姉を起こしに来ることも…

なので、父の軽率な真向け面を拝んで笑い出したい筈だ。口元がぶるぶる震えている。

それに、父の扱いは酷いもので、母なら土に触れないように、浮かせて運んでいたが、父は手だけを二人で引つ立て、引きずるように、運んだのだったのだ。

可哀想なことに、靴を履いておらず、靴下だけが玄関のドアの下、狭い溝に、引つかかり、慣性の法則に従って脱げたのである。

素足のまま、雨で泥と化した土に、浸されながら泥が足に蔓延ったのだ。残念残念。体育座りも無念無想に映る。死体は喋らないから、扱いが簡単で大喜びです。

「これでいいのよね？」

と、土をスコップでかぶせて、のちに、そう訪ねてくれたのは、姉の方だった。

天気は、昨日の夜と違い対象的な青だった。朝の風も髪の毛で感じるような透き通った青だった。

「これで良い…かな？　もしかすると、ゾンビ化して、また地上に姿を現すんじゃないか？　念のため、足の体重で土を固めた方がいいかもよ？」

提案は幼稚で、でも、ちょっとした遊びは大切だと思つての案だ。案の定、もしゾンビに変わつて、目の前に現れたとしても、鼻と口を姉の杓文字で叩き割るだけだから問題ないはず。おれはそう思つた。

「足の重力で固めるなんて、貧相で凡庸な考えね。遣るのなら、テープレコーダー5000個分を段ボールに積めて、私たちの家の二

階から自由落下させた方がいいんじゃないの？ ……先に行わせて、冗談よ」

口を動かすのが得意になってきたのか、慣れてきたのか、今日は饒舌な姉だな。

昨日の夕食時の遣る気のなさはどこへ行ったのだろうか？

恐らく、天気で気分が変わったりするに違いないと、仮説を立ててみよう。…忘れないよう、心掛けたい。けど、忘れそう…

「姉の体重で、十分じゃないの？ 重たく無さそうだけど、人並みには、十分そう。」

前に、貧弱そうと評価した姉の体付き、でも、意外と底無しの体重でそうと改めて、仮定して表して観る。

暖かい温もりを感じるな…と思ったなら、もう、大分早朝から遠ざかっているに見える時間帯だった。

正確な時間は分からないけど、8時くらいだろう。

「私の体重じゃあ、中にいる人が原型留めきれないじゃない。あなたがやりなさいよ。」

随分と歳の差が、さほど無いような会話を繰り広げる。どうしてだろう？

「つまり、『私は自分の体重を気にしています』を演出していると…ですね？ 太りたいのですか？」

「はい」

「…分かりました。では、二項目の話に従って、おれが土を挟んで、親を踏み潰します。」

丁寧な物言いで、おれは定位置につくことにした。定位置は、土の色が新しいかぶせたばかりの小山がある地表です。

おれの脳内では、姉は今の体型に満足して良ないのかと…認証を刻まれました。

確かに、引きこもりによくありがちな、欲求不満な体型をしている。いつも何食っているんだろう？

と、話は置いて、おれは…

「かけ声は…スクリプイタクノライトネルサ！」

ドサッ

姉のいる目の前で、大変な乱舞狂乱語彙を吐き捨ててしまった。ほとんど、直感の意味のない単語と言えよう。いや、新語か造語か、どっちかだ。

腰から若干盛り上がった小山に着地したため、パジャマは台無しに汚れてしまった。

洗濯機で洗えばいいのかもしれないが、おれは狩人の卵、そして、小学生五年生の生活力、言うなれば、洗濯物など、洗濯できないのだ。

あ、そうだね、姉に頼もう。

「汚れた。姉」

「…何かしら？コトシラ、まさか、今になって小学生気取りでいるつもりなのかしら…」

今始まった事です。只何となく、背中から飛び込みたい気分だったのです。おれは小学生です。認めますよ。一人前の狩人に離れないと認めます。

だから、今更甘えさせてください。

「…計算の慣れの果てです。すみません、計算していました。おれは、ずっと前から、姉の温もりがほしかったのです。すみません、弟を生け贄にしてすみません。」

口が勝手に、動いてしまった、突拍子を出す本心を言ってしまったかにも思える。

そんな事は考えまい。考えまいが、口からぼろりだ。やっぱり、カツコ良く生きられないのが現実なんだね。

「ここは、驚くべきなの？ 最初から分かっていたかといえばいい？」

「それは、俺にも分かりません。口が先走ったもので…」

おれは足を組んで、贅沢に手を頭部に回した、しかし、小山に沿うようにして仰け反っているため、ブーメランが地面に突き刺さったような不格好さに仕上がっている。

「あと…言っているのかしら？」トシヲくん

くん？

「どうぞ、」

差し出すような、先方を譲るような言葉の使い方、巧言をたしなめる。

「あなた知らないだろうけど、弟は生きています。」

贅沢三昧で、締めりつけの多い、それでいて、背中が地面の仄かな冷たさを維持しながら、まだまだ、暖かみのある抜かりのない身体に反復して、反射的に飛び跳ねた傍ら、正気に戻って、目を覚ました視線の先に彼女がいた。

おれは此処にいると…

おれはここで佇んでいると…

「え？ そんなの？」

クールビューティーな立ち振る舞いは、出来なくともおれは、立っていた、いつの間にか、その場に立っていたのだ。

背後には、父母の墓を感じて。

「そうみたいね。いやいや、そうですね。」

「言い方変えるな！可愛くない！」

そうか、まだ、生きていたのか、あの優等生は、殺したのにどうして死なないんだ？

難点があるのか、難点どころか、特異点か。いや、違う。神だ。

「弟を殺さないといけないのかよ、また、…」

がつくりうなだれるフリをする。

「コトシラくんは、私の弟だけど、弟が二人以上いたら悲しむの？」

「悲しむじゃなくて、独り占めにしたいんです！おれは、」

その通り、本音は何時だってそうだったかもしれません。記憶が失ったとかそんな回りくどい言い訳が正しかったのでは、なく。

純粹に、姉が…古見子さんが好きだからです！

決まっているじゃありませんか！

それ以外に、弟を殺す理由はありますか？

難儀な事したいですか？

したくないです！

愛に、絞められて殺されたいです！

「…問題ね。非常な問題。…私はあなたの愛には答えられないのが問題ね。だって姉だし」

姉姉姉！

永遠に、結ばれない。壁が…そこにはあるようです。

「そんなルール、誰が決めた！！！！、よし分かった、みんな殺

して、誰も文句言わせないようにしてやるよ。」
もしくは、姉がおれを殺すかのどちらか…

「…頑張っ
てね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9554z/>

コトシラ姉。

2012年1月10日20時59分発行